

アカデミックフェス 事後レポート

企画名： ドイツのサッカークラブにみる「市民参加」型社会
—なぜブンデスリーガにひとが集まるのか—

企画名（英語）： German Citizens' Participation as Seen in its Soccer Clubs:
Why the Bundesliga brings so many people together

時間： 15:00~17:00

会場： アカデミーコモン ROOM-F (A4会議室)

登壇者： 宮本真也 (情報コミュニケーション学部教授)

田中ひかる (法学部教授)

奥寺康彦 (横浜FC会長)

二宮清純 (スポーツ・ジャーナリスト)

釜崎太 (法学部准教授)

開催概要：

社会運動への市民参加の意義が広く認識されているドイツでは、スポーツクラブが市民参加を促す重要な組織のひとつに位置づけられている。本企画では、市民参加の機能がブンデスリーガの成功とも結びついていることを紹介し、現代日本に生きている私たちがドイツに学ぶべき点について議論した。

開催概要（英語）：

The significance of participation by citizens is widely recognized in Germany; and an important organization in driving such participation is the German sports club. This project looks at how citizens' participation is linked to the success of the Bundesliga, and discusses what lessons we, living in current day Japan, can learn from Germany, a society of participatory citizens.

開催内容：

セッションの冒頭に宮本真也教授(情報コミュニケーション学部)から、市民社会は「Bürgergesellschaft」と「Zivilgesellschaft」に区分され、前者が封建社会の支配関係から解放された市民という私人からなる社会を指すのに対して、後者が国家の官僚機構や市場経済から自立した公論によって国家政策や経済構造に影響を及ぼす自発的な結社や集団からなる社会を指しており、本セッションでは後者の市民社会を問題にする旨が説明された。

奥寺康彦氏(元 1.FCケルン、ヴェルダー・ブレーメン)と二宮清純氏(スポーツジャーナリスト)の対談では、奥寺氏のドイツでの体験を軸にしながら、サッカー選手の技術

や戦術の違い、これからの日本代表の在り方など多様な話題に言及されたが、なかでも「フェアアイン(Verein)」と呼ばれるドイツに特有のサッカークラブの組織形態が、サッカー選手の間でも、サポーターたちの間でも、ドイツでは大きな人気を博しているという指摘は本セッションの核心部と密接に関係するものであった。

この対談に続いて、田中ひかる准教授（法学部）から、現代のドイツにおいては公正・自治・連帯を重視する社会運動が多様に展開されており、現実社会に少なくない影響を与えていることなどについて説明がなされた後、港町ハンブルクの「空き家占拠運動(スクワット運動)」が紹介された。

このハンブルクの「空き家占拠運動」を契機に、プロサッカーリーグに代表されるような、近年の商業主義的な傾向に反旗を掲げるクラブとして有名になったFCザンクトパウリの事例が釜崎太准教授（法学部）から紹介された。さらに、ドイツのスポーツクラブは、ブンデスリーグで活躍しているようなビッグクラブであっても、すべて「フェアアイン」と呼ばれる非営利法人組織が議決権を持ち、多数決や選挙という民主的な方法で重要事項が決定されていることが報告された。それゆえドイツでは、スポーツクラブが民主主義や社会運動の在り方を市民が学ぶ重要な機会を提供しているだけではなく、例えば市民自らがプロのサッカークラブを動かすなど、市民参加が現実社会を動かしていることを実感する場にもなっていることが伝えられた。

フロアからは「日本で市民参加を促すためにはどうしたらよいのか」などの質問があり、スポーツをはじめとする文化的な場で小さな民主主義や運動を組織していくような試みの可能性などが議論された。

以 上